

に呱呱の聲をあぐる幼な子は常に此の偽りを誠としやうと無意無心のうちにつとめて居るのに、夢幻に酔へる我々の心はいつまでもいつまでもこれをさとすることは出来ないのであるが。親心にかへることは出来ないのであるか。

日々を幼な子の友として送れる天下の姉妹たちよ。母たる自覺にかへる縁は卿等が目の前にみち

## 白痴教育者 セガン

—(ポイト氏による)—

十九世紀の始の頃までは、缺陷兒就中白痴は到底教育すべからざるものと看做されてゐました。佛蘭西や亞米利加に於ては、比較的早くこの方面に着眼する人があつて白痴教育を試みた人もあつたのでありますが、何れも著しい成績を擧げる

みちて居るのに何故にこれを見やうとはせられぬのであるか。何故に一時の樂をこゝに求むるに止つてそこに永遠の親心の泉を汲まれぬのであるが。ルーソーの言葉を借り來つて思をのぶる眞意、眞の教育者の意義を悟られるならば余の言葉も亦空の空に消え失せることはないであらう。

紹 介 子

には至りませんでした。然るに千八百三十七年「白痴の使徒」エツアール・セガンが所謂生理的教育法を創始して著しい効果を收め得た爲めに、人々は漸くこの方面に注意するやうになり、一般教育の進歩と共に缺陷兒の教育も次第に進歩するやう

になりました。

## ○彼れの生涯、精神、事業

エヅアール・セガンは千八百十二年、佛蘭西のクラムシーに生れました。彼は「アエイロンの自然兒」を馴致教育して名聲を博したジャン・マルク・ガスバール・イタールの下にあつて醫術並びに手術を習得しました、而してイタールに徳憑されて白痴の研究調査及び取扱方に生涯を委ねることにしたのであります。斯くの如くセガンはイタールの門から出ては居るのでありますが、イタールの弟子ではないのであります。セガンはたゞイタールによつて問題を得たゞけでありまして、彼を導いた思想は、かの有名な社會主義者サン・シモン及びその後身の思想であつたのであります。セガンは二十五歳の時、缺陷兒教育の最初の企畫を行ひました。セガンは精神病研究者として著名なエスキロールの下にあつて缺陷兒教育に努めたの

でありませんが、エスキロールも到底その不可能なことを斷言して居りました。然るに一年半のセガンの勞苦は酬いられずには居ませんでした。彼が面倒をみてやつた缺陷兒はその感覺を働かせることが出来るやうになり、比較したり、話をしたり、物を書いたり、勘定をしたりすることが出来るやうになりました、この成功に力を得た彼は缺陷兒學校を創設して益々その企畫を擴大して行くことに努めました、五年の後に彼の功績は巴里學術協會からも認めらるゝやうになりました。彼はこの間常にバンフレットや著書を公にして彼の説の弘布に努めてゐたのでありますが、千八百四十六年には「白痴及缺陷兒の論理的取扱、衛生及び教育」といふ時代區劃的な著書を公にしました。この著は一般世間から直ちに認められ、前記の協會からも推贊せられました、セガンは人道の爲めに大なる貢献をなしたとあつて羅馬法王バイアス九世から親筆の感謝狀を受取りました。缺陷兒を如何に

取扱ふべきかに就て考慮を費してゐた程の人々は皆目を瞠つてセガンの仕事を見るやうになりました。世界各地の精神病研究者がセガンの仕事を見るために巴里に集つて来るやうになりました。けれども好事魔多しとやら、セガンが成功の時間の眞只中に於て、千八百四十八年の革命が勃發したのであります。セガンは新政府の施政を喜ばない事情がありましたので、故國を去つて米國に移り住み、この地に於て再びその事業を續けて行くこととなりました。セガンは始め暫くオハヨーに滞在し、次いでペンシルベニアの白痴黄育院を主宰することになりました。けれども英語を便ふのに多少の不便を感じた爲めであつたかして、セガンはあまり腕を振ふことが出来ませんでした、その後一度故國を訪れた後、セガンは事業から退いて紐育に隱栖するようになりました。しかも缺陷兒教育に對する彼の興味が失せ去つたわけではありませんが、依然彼はこの方面に携つて居る人々に有益

な助勢や助言を與へることを惜みませんでした。

セガンの最後の事業は、紐育市に精神薄弱兒及び身體薄弱兒の爲めに、生理的訓練を與へる學材を創立することでありました。彼はこの學材の設立趣意書の中に「生理學を教育に應用することは余が青年時よりの仕事にして、四十二年來余が思想の主なる對象なりき、余は余が晩年をこの事業に傾け盡さんとす」といふやうなことを言つて居ります。けれども這麼趣意書を書いて二週間と経たない内に、彼は不歸の客となつて了つたのであります。一八八〇年けれども彼の一生には意義がありました、彼の一生の宿題タスクは既に完成せられてゐたのであります。彼はその青年時の願望が十分に實現され、その原理及び方法が世界の缺陷兒教育の根抵となつたことを知つて、安心して瞑目することが出来たのであります。

## ○彼れの教育原理

次に少しくセガンの教育原理を説明してみませう。

セガンにとつては、缺陷兒教育は特殊なものはありませんでした。缺陷兒教育は普通教育と同じ目的を有して居り、その方法の如きも、普通の方法を精神的缺陷あるものに應用するに過ぎないのであります。これは學校で普通に行はれてゐる方法を取り來つて、直ちに缺陷兒の教育に適用するといふ謂ひではありません。學校で行うて居る方法はセガンの考によれば、普通兒にとつても適當なものではないのであります。セガンの言ふ所に依れば、學校は體質に於て異り、生理的要求に於て異り、精神的傾向に於て異る、數多の兒童を集めて日日毎日無差別的に、四五時間づゝ智識の餌を與へて居るのであります。記憶といふ機能のみが使用されてゐて、その他の精神的及び身體的の機能は全然閑却されてゐて萎微に任してあるのです。斯る教育に取つて替るべく、個體的の生

活力を擷み得る教育、すべての機能、作用及び性向に於て全人ホイルマンを作らんとする教育が、起らなければならぬとセガンは主張するのであります。畢竟彼の説く所は、各兒の個性を尊重して、その力一ぱいの發達を遂げさせることでもあります。

普通兒の場合には、このことは太して困難ではありません、健全な機關の使用を規則的ならしめ、その作用が自由に容易に働くところの範圍を擴張すればいゝのであります。缺陷兒の場合には、屢々診断や取扱に困難を感せしめる神経系統の病理學的狀態の存在に於て、より多くの問題を含むこととなるのであります。この場合に於ては發達し來るべき機關を待つて居るのではなく、何うとかしてその生活力を遲鈍狀態から覺醒せしめて、教育が始まる前にその活動を起さしめなくてはならないのであります。

人間の精神には智情意の三者が働いて居ります、この三者はそれぞれ劃然と分けらるべきもの

ではありませんが、便宜のために普通斯くの如く分けて考へるのであります。人間は同時に感じた。理解したり、欲したりするのであります。けれども教育は必ずしも同時にこの三者に訴へて行くものではありません。人間の成長する様を見るに、知る前に、先づ動き且つ感ずるのであります、その行爲及び思想の論理的意義を意識する前に、長い間知つて居るのみで過ぎるのであります。この理由からして教育は精神作用を取扱ふ前に、身體の活動を取扱ふべきであります、意志を取扱ふ前に身體の活動を取扱ふべきであります。

兒童の無心の運動が矯正され、筋肉装置の缺陷が補充されない内は、正當な教育の開始を考へることは無駄であります。「混亂せる作用によつて障礙されて居る畑に智的機能の收穫を何うして期待することが出来ませう」とセガンは言つて居ります。教育を受ける準備としてその以前に、看護婦なり醫師なりが、身體的健康を確立し、支持する

ために、衛生學を應用したり、藥餌を投じたりすることに於て遺漏があつてはなりません。

扱てその次ぎに、始めて身體の教育が始まるのであります。セガンは物理的並びに生理的過程なることを示さんが爲めに「身體の教育」といふ代りに「活動の教育」といふ語を選んで居ります。

活動の教育は運動能と智覺能といふ二つの相關的方面から考へられなければなりません。運動能は多くの行爲、作用、習慣及び身振り（これによつて個人はその周圍の世界との關係に入り、而して又その内的衝動に外的表現を與へます）を含んで居ります。知覺能はその媒介物として身體の表面に分布して居る種々の感覺官を持つてゐますので諸感覺が外界から得來つた感念をば感覺中樞へ送るのであります。

一般の教育は心の問題にばかり捉へられてゐて身體の問題を全然忘れ去つて居ります。而して運動能と知覺能との訓練を機會に委して置くばかり

であります、けれども人間性をよく考へてみればこれは明かに間違であることが分ります。身體は完全な生活に於て、その役目を果すためには心と同じやうに訓練を必要とするのであります。天の恵み如何に厚き兒童であらうとも、その身體の運動は決して私達の想像するやうに、規則的なものではありません、又有効的なものではありません、而して白痴に於ては彼等の殆んどすべてが幾分の異常を有し無力を現して居るのであります。感覺に就ても同じことであります。普通の場合、それから病的の間合はいふまでもなく兒童は特別の取扱ひを受け、その作用を、より規則的に、より正確に、より敏捷にならしむる必要があります。

### ○筋肉の教育

セガンの方法の主要な點は、精神薄弱者を教育する出立點として、筋肉の協働作用を修練させることとあります、即ち彼は、缺陷ある身體機關を教

練して、その機能を發達させ、又機能を修練して缺陷ある身體機關を發育せしむることを力説したのであります。

大抵の白痴は幼兒が据ゑられたまゝ動かないで居るやうに、又は物を掴むことが出来ないといったやうに、運動の能力に於て部分的に缺陷を持つて居るものであります。而して又一方には多くの不秩序的な運動（多くは手首や指なぞに於て）を持つてゐて、正しき活動を修練せしむる障礙となるものであります。取扱の一般原理として、或る一つの缺陷があつたならば、それにのみ目をつけずに、動力作用の一般的不能から來る一部の現れとしてそれを取扱ふのであります。

先づ一番最初に爲さるべきことは、白痴の消極的不動性を、すべての尋常の活動に於ける出立點である所の故意の不動性に變へることとあります。兒堂は何か覺える前に先づ自分の意志で立つたり、坐つたり、屈んだりすることを學ばなければ

ばなりません。兒童が幾分その運動を支配し得るやうになり、又しばらくは停止して居ることが出来るやうになつたならば、歩行の訓練を與へるべきであります、兒童が若し動くことが出来ないか又は動く事を欲しなかつた場合には、自發的に爲したと同じやうな効果を與へる機械的な方法を用ゐて本質的な運動を行はしめるのであります。即ち baby-jumper とか跳板とかを用ゐるのであります、非常に缺陷のある者に對しては尙この他に種々の工夫を凝らし、音樂などを應用して居ります。是がしつかりして身體の土臺が据わるやうになると次ぎは手の訓練であります。先づ物を握つたり、放したりすることを練習するのであります。これには梯子に乗せて手を離すと落ちるので止むなく手を働かせるといつたやうなことをさせたりなぞするのであります。尤も梯子から落ちないやうに先生が抑へて居ることは言ふまでもありません、セガンは又スピードや如露や木馬や槌等を應

用して、成るべく興味ゆたかに兒童に修練せしむることを念として居ります。手足の訓練が十分出來上つた後、兒童は摸擬によつて種々の活動を誘ひ出されるのであります。

摸擬といふことは被動的ではなく、さうかと言つて能動的でもありません、摸擬の手引は被動的でありますが、その實行は能動的であります。摸擬には二つの形式があります。他人が手を上げたから自分も手を上げるといふやうな、他を真似る身體的の活動は身體的摸擬であります。他人が机の上に乗を伏せたから自分もその通りにするといふやうなのは對象的摸擬であります。この兩者は共に必要でありますが、就中前者は必要であります。體操によつて力と忍耐とを修練し得るとするならば身體的摸擬によつて正確と迅速とを學び得るのであります、兎も角坐るとか、立つとかいふやうな身體全體の運動は摸擬によつて習得し得るのであります。續いて眼瞼とか、唇とか、舌

とか指とかいふやうな特殊の器官の運動に移るの  
であります。けれども如何なる白痴を取扱ふ場合  
でもステロ版で起したやうに一つことばかり繰返  
して居るのはいけません、常に種々の器官に訴へ  
て、児童が己れの意志によつて摸擬を行ふやうに  
仕向けなければいけません。摸擬を課してゐる内  
に児童の顔が漸々と引締つて來ますので、その結  
果の目覺しいことが明瞭に分ります。

摸擬は或る程度までは一人々々に就て教へなけ  
ればなりません、或る程度に達してからは缺陷  
兒を一所に集めて練習する方が便宜であります、  
稽古が若し新しいものである場合には、児童はた  
ゞ先生の行ふのを見得るやうに並ばして置くので  
あります、若し又稽古がそれまでに幾度か行つた  
ことがあります、たゞそれを正しく且つ早く行ふため  
に練習をする場合であつたならば児童は先生を見  
得ると同時に児童同志がお互ひに見得るやうにし  
て、二重の刺戟を得るやうにするのであります。

摸擬によつて爲さるゝ體操は實に測り知るべから  
ざる効果を有して居るのであります、缺陷兒は  
これによつて諸運動を迅速にし、視覺作用を改善  
し、知覺の範圍を擴張し、理解に正確を與へ、全身  
體を意志の統轄の下に持ち來たし、就中死せる手  
を教育して生きたる仕事を爲すを得しむるのであ  
ります。それは随分まだるつこい仕事です。個人  
的に、團隊的に數ヶ月も辛抱して練習して居ると  
児童はやがて稽古に於ける摸擬が巧みになるばか  
りでなく、日常生活にまで新しく習得した摸擬の  
力を應用するやうになるのであります、この時に  
はもう缺陷兒は先生がすると同じやうに食べやう  
とし、着やうとし、立たうとするのであります。  
而して自分よりも劣つて居る他の缺陷兒を導かう  
とするやうになるのであります。而して遂に他  
の、より多く恵まれた児童達が強制された時にの  
み行ふことを習慣の力によつて行ふやうになるの  
であります。



## ○感覺の教育

筋肉系統の異常が正されたとしても、感覺の異常がある限りは缺陷兒教育は又一つの躓きに出會するのであります。觸覺は諸感覺の元であり、又一番先きに活動を開始する感覺でありますから、これに就ては十分注意を拂はなければなりません。通常缺陷兒の觸覺は鈍いものであります。把持の練習が出来て居る場合にはこの感覺を喚び覺ますのに、左まで骨は折れません。

嗅覺や味覺の發達も缺陷兒教育に非常な關係を持つて居りますので、セガンは斯る感覺に對しても種々工夫を凝して、その發達を企圖して居るのであります。

聽覺に關して言ふならば、缺陷兒の特色として、聞くことは出来るのですが、傾聽することは出来ません。乃でこれを何うするかといふに雜音（例へば雨の音、風の音、フライ鍋の煮え立つ音等）、

音樂及びお話によつて導くのであります。

最後に特別の訓練を要すべきものは視覺であります。缺陷兒は多くの場合に於て、單に見るばかりで、凝視することが出来ないのであります。之を救ふためには高化鏡カレイドスコップ、色球、圖表、繪畫等によつて注意を惹き起さしめ、次第に導いて視覺を一に集め得るやうにさせるのであります。又先生が缺陷兒の眼を凝然とみつめるのも効能があります。

讀書及び言語の修練は、缺陷兒の教育上、最も困難なことであります。是等の兒童をして發語せしめるためには十分の忍耐を以て舌、唇等の運動を練習せしめ、次第に發音を學ばしめなくてはなりません。模擬や唱歌や根氣よく誤謬を正すことによつて一般の身體狀態の改善が促された時に於てこそ舌や唇の運動も兒童が意の儘に支配することが出来るやうになるのであります。しかしながら言語の使用は發達せる精神力に俟つ所が多い

のでありますから、斯る生理的の練習を行つたの

みでは固より言語の練習を全うし得らるゝものでは  
ありません、打つといふ動詞は打つ身振りによ  
り、泣くといふ動詞は泣く真似によつて教へると  
云ふやうに成るべく具體的方法を用ゐて言語を  
習得せしめるのであります。白痴の教育に於ては  
智的教育といつても以上の程度に止らざるを得な  
いのであります。セガンは尙その上に白痴をし  
て幾分なりとも社會のために役に立つ人とならし  
めたいといふ希望から、生活を支配してゆくため  
に重要缺くべからざる所の記憶と想像とを興へや

うとして居ります。

斯くてセガンは白痴教育の土臺を築いたのであ  
ります。セガンの著書としては前にも一寸申しま  
した

『白痴及び缺陷兒の倫理的取扱、衛生及び教育』  
(一八四六年出版)及び千八百六十六年に初版を發  
行し、千九百七年に再版を發行した。

『白痴及び生理的方法に依る其の取扱方』  
以上の二部が有名であります。尙この他にも千八  
百四十七年のチェンバース・ジャーナルにも彼の  
論文が三篇程掲載されて居ります。

小説 夏子 (つらき)

六

それから後、夏子は度々病院を見舞つた。芳枝  
が、誰れよりも自分の見舞を喜ぶといふことを聞

若葉

いたからでもあるが、實際芳枝の容態が氣にかゝ  
つてならなかつた。それから又一つには、芳枝の  
お母さまが妙に夏子をひきつけた。あの脊のすら